

## 油彩

(テンペラ併用)

石榴と洋梨を描く①

## 三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展「セントラル美術館  
油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具後絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現  
代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品、文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在'96  
'97 春陽会会員

## ■ 体質顔料について

今回もパネル作りから始めます。  
ところで、これまでいろいろな  
下地塗料を紹介してきました。そ  
の代表的なものは、白亜地と石膏

地でしたが、これらのどちらが良  
いというものではありません。古  
いヨーロッパでは、イタリヤでは  
石膏地、フランドルやドイツでは  
白亜地というように、その土地ご  
とに使ったものが異なるというだ

けのことです。マニュアル好きな  
日本人の律儀さ(?)から、イタ  
リアの技法を学んだ者は石膏地を  
推奨し、ドイツやフランスのそれ  
を学んだ者は白亜地を推奨してい  
るのです。

石膏地に使われる石膏とは、「天  
然石膏」のことで、硫酸カルシウ  
ムと水を成分とする鉱物です。画  
材店で入手する「焼き石膏」はこ  
れを約100℃で焼いたもので、水を  
加えると固まりますので、このま  
までは使えません(※注1)。ここ  
でつかうものは、「ポローニヤ石  
膏」などと、産地名が付いたもの  
です。この下地は、イタリヤ語か  
ら、(Gesso/Gesson)と呼ばれてい  
ます。(※注2)

白亜は、微生物(孔虫類)の死  
骸や貝殻などが堆積して化石化し  
た、もろい泥灰岩で、主成分は炭  
酸カルシウムです。良質のものは、  
フランスやスペインなどで産出し、  
その地名を取って「シャンパーニ  
ユの白」とか「スペイン白」と呼  
ばれています。ちなみに、英語で  
は(Chalk(チョーク))と書きます  
が、言わずと知れた「白墨」のこ  
とです。

アトリエでの三浦明範先生



これらはシルバー・ホワイトや  
チタニウム・ホワイトなどの「白

色顔料」に対し、「体質顔料」と呼  
ばれていますが、これは染料系の  
色材を着色させるための媒質とし  
て使われるためです。すなわち、  
白さはそれほど強くなく、他の色  
を食わないのです。あたかも、透  
明なガラスを細かく砕いていくと、  
白い粉になるのに似ています。

したがって、油で練ったものは  
真っ白にはならず、灰色がかった  
ものになってしまいます。それで  
もこれらの顔料を使うのは、水  
(膠)で使うことと、何より、現  
地では大変安価で入手できるから  
ではないでしょうか。

しかし、日本では良質のものが  
産しないため、すべて輸入に頼ら  
なければなりません。日本の画材  
店の棚に乗った時点で、数十倍に  
も値上がっています。

では、これら天然の体質顔料に  
代わるものは、日本では手に入ら  
ないのでしょうか。

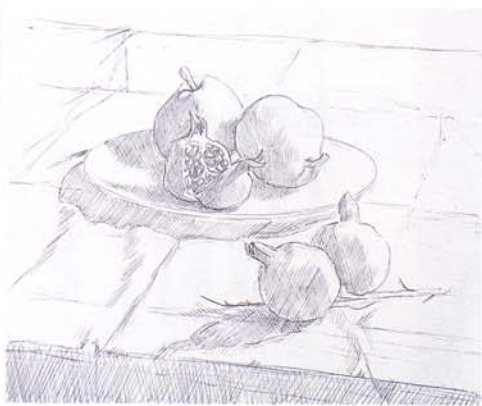
とです。

たとえば、日本画の最も重要な  
白である胡粉こたというものがあ

すが、これは貝殻を焼いて作られたもので、白亜と同じ炭酸カルシウムが主成分です。もちろん、日本画材料店で入手するほか、塗料店で下地材料として置いてあるものも使えます。

また、化学的に合成で作られる石膏(硫酸カルシウム)や白亜(重質炭酸カルシウム)または沈降性炭酸カルシウム)もあります。これはすべて薬局で食品添加物として、入手できます。

この合成のものは、純度が高く、



(制作過程1)  
墨によるアンダー・ドロウイング。

粒子が細かくて均一であるのに対し、天然のものにはたくさん不純物が含まれ、粒子が不均一です。そのため、一見、合成のものの方が優れていると思いがちですが、私の経験では、微妙な点で天然の方に軍配を上げてしまいます。これは、この不均一さが乾燥時に収縮を妨げ、適度な軟らかさを与えているからなのです。

しかし、あえて「イタリアの石膏やスペインの白亜に限る」と言うつもりはありません。ヨーロッパ



(制作過程2)  
油絵具ロー・シエンナと油メディウムによる、アイソレーション(食い込み止め)及び、インプリミトゥー。

パ至上主義から解放されるべきで、中国や韓国、日本にも、これに代わる天然の下地用顔料があるので、はと、現在あれこれと試みているところです。

たとえば、カオリンで作ったものを以前紹介しましたが、これは、中国江西省浮梁県の高陵(カオリン)で良質のものが産したためについた名前なのです。

## ■パネルの制作

さて、今回の制作では薬局で入



(制作過程3)  
明暗の調子によるモデリング。明部にはテンペラ白、暗部は油絵具パーント・シエンナ。

手できる、硫酸カルシウムを使ってみます。

これは炭酸カルシウムに比べて、塗布する時はボテボテして重い感じがしますが、最後のヤスリがけでは目詰まりしにくく、軟らかいので軽く削れます。すなわち、厚塗りして削る方法では、より適していると言えます。

前回同様、基底材としてパネルと和紙を使います。

1 70gの膠に対し、1000ccの水で溶かします。

2 パネルにこれを前膠として塗布し、乾燥後、和紙(今回はドウサなしの美濃紙)を重ねて、上から2度目を塗って接着します。

3 同じ膠水に、硫酸カルシウムをひたひたまで振り入れ、パネルに縦横交互に6度塗りします。

4 乾燥後、#240の紙ヤスリで表面を整えます。この他に、石膏地では鋼板を使った磨き方があります。鋼板を斜めに当てて、削ぎ落とすのです。これは、



(制作過程4)  
果実に、シルバーを少量加えた固有色。石榴・カド・レッド、ウルトラマリン。洋梨・イエロー・オーカー、ヴェイジアン。

紙ヤスリなどなかった時代の方  
法ですが、金箔を撃つ（箔を貼  
ること）時など、鏡のように平  
らにするには、いまだに有効な  
磨き方です。

## ■「石榴と洋梨」の制作

今回のテーマは、秋の果物です。  
近所の散歩コースに果樹園があ  
り、梨やキウイなど季節の果物の  
もぎ取りが、我が家の年中行事に  
なっています。先日は栗拾いをし  
てきましたが、たまたまその農家

の庭先に真っ赤な石榴がたわわに  
成っているのを見て、栗をそつち  
のけに、石榴を分けてもらいまし  
た。

その石榴と洋梨の組み合わせで  
す。赤と緑、布の軟らかさと皿の  
硬さ、各々の対比で構成してみま  
した。

- 1 木炭で大まかな見当をつけ、  
墨でアンダー・ドロウイングを  
行います（制作過程1）。
- 2 ロー・シエンナに油メデイウ  
ムを加え、倍のテレピンで緩く

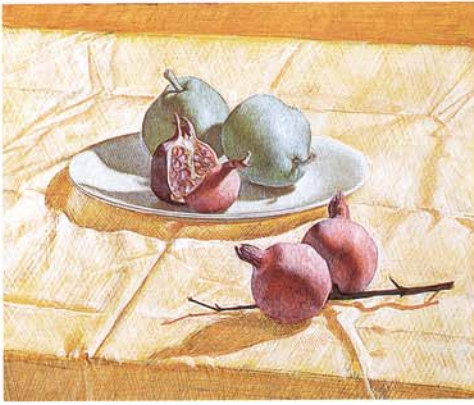
したものを全面に塗布します  
（制作過程2）。

- 3 明部はテンペラ白、暗部は油  
絵具・バント・シエンナでモデ  
リングしていきます（制作過程  
3）。
- 4 果物の固有色。少量のシルバ  
ーを混ぜた絵具に、油メデイウ  
ムを加えたもので行いますが、  
伸びが悪いというのでテレピン  
を加えるということはしません。  
下の層の油絵具もテンペラも一  
見乾いているように感じますが、

実際は樹脂分が固まっているだ  
けで、テレピンで簡単に再溶解  
してしまいます（制作過程4）。

- 5 テンペラ白で浮き出しを行いま  
す（制作過程5）。
- 6 皿に固有色を塗り、テンペラ  
で浮き出します（制作過程6）。
- 7 布にも固有色を塗布し（制作  
過程7）、果実に二度目の固有色  
と（制作過程8）、テンペラ白の  
浮き出しを行います（制作過程  
9）。

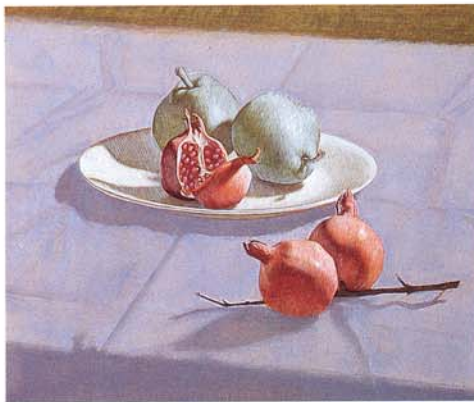
（※注1）焼き石膏は、長時間大量  
の水につけて固まらなくして「殺  
して」から使うか、水とまぜると  
放熱しながら固まるので、逆に加  
熱し続けると固まらない。  
（※注2）アクリル絵具の下地塗  
料もジェッソ（Gesso）というが、  
石膏のことではなく、単に下地塗  
料という一般名詞的な意味で使わ  
れている。



（制作過程5）  
テンペラ白による浮き出し。



（制作過程6）  
皿に固有色。シルバー・ホワイト、  
ヴィリジアン、アイボリー・ブラック。



（制作過程7）  
布に固有色。シルバー・ホワイト、  
コバルト・ブルー、アイボリー・ブラック。



（制作過程8）  
2度目の固有色。  
石榴…クリムソン・レーキ、カド・イエロー。  
洋梨…カド・イエロー、ヴィリジアン。



(制作過程9)  
テンペラ白による浮き出し。